

ペトルス・ウェネラビリス 『サラセン人の異端大要』

矢内義顕

本稿は、『コーラン』の最初のラテン語訳の発案者として知られる、12世紀のクリュニー修道院長ペトルス・ウェネラビリス (Petrus Venerabilis 1092/94-1156年) の『サラセン人の異端大要』 (Summa totius haeresis Saracenorum) の全訳と解説とから成る⁽¹⁾。それに先立ち、ペトルス・ウェネラビリスの生涯と本書の成り立ちについて簡単に述べておくことにする⁽²⁾。

1. ペトルス・ウェネラビリスの生涯と『サラセン人の異端大要』

ペトルス・ウェネラビリスは、1092/94年、オーヴェルニュのモンボワシの領主の子として生まれ、1109年にクリュニー修道院に入る。当時のクリュニーは、第六代修道院長フーゴー1世 (Hugo I 在位1049-1109年) の下に最盛期を迎えていたが、彼の死後、組織の肥大化に伴う規律の乱れが生じる。そのクリュニーを再建すべく、ペトルスは27歳の若さで第八代クリュニー修道院長となる。彼の下でクリュニーは第二の最盛期を迎える。30年間にわたる修道院長としての職務の中で、彼は、クリュニー修道院のみならず、その数2000にも及ぶ分院を指導し、また当時の教会・修道院関係者、世俗の人々とも交流する。その中には12世紀キリスト教界の最大の指導者クレルヴォーのベルナルドゥス (Bernardus Claraevallensis 1095-1153年) や、数々の問題を引き起こしたペ

トルス・アベラルドゥス (Petrus Abaelardus 1079-1142年) もいた。

著作には『奇跡について』(De miraculi)『ユダヤ人の古くからの固執の論駁』(Adversus Judaeorum inveteratam duritem)『書簡』(Epistolae)などがあるが⁽³⁾、神学者としての彼の最大の業績は、イスラームに関するものであろう。

1142年の3月、ペトルスはアルフォンソ7世 (Alfonso VII在位1126-57年)の招きに応じ、ピレネー山脈を越え、スペインの土を踏み、翌年10月まで滞在する。その目的は、クリュニー修道院の財政的援助を確保するため、またクリュニー修族に属するスペインの修道院を視察訪問するためであった。この旅行期間中に彼は、イベリア半島におけるイスラーム支配の現状を目の当たりにし、この宗教を本来の源泉から研究する計画、具体的には『コーラン』(Al-Qur'an『クルアーン』)を始めとするイスラームの文献をアラビア語からラテン語に翻訳する計画を立て、実行に移す。それは、キリスト教の側のイスラームに関する情報の不足、無知を補い、正すこと、そして正確な理解に立った上でその誤謬を論駁し、ムスリムを改宗へと導くことを目的としたものであった。すでにトレドではイスラームの自然学、哲学の研究とアラビア語文献の翻訳も進められており⁽⁴⁾、ペトルスは、彼の計画を実行するために相応しい翻訳者を見つけることができた。その翻訳者とは、ケトンのロベルトゥス (Robertus Castrensis)、ダルマティアのヘルマヌス (Hermannus Dalmata)、トレドのペトルス (Petrus Toletus)、ポワティエのペトルス (Petrus Pictavensis)、そしてアラビア人ムハンマド (Muhammad) の五人である⁽⁵⁾。彼らによって、『トレド集成』(Corpus toletanum, Collectio toletana)と呼ばれる以下の五点の翻訳が完成される⁽⁶⁾。

『コーラン』(Koran, Lex Sarracenorum)

『サラセン人とキリスト教徒の往復書簡』(Epistola Sarraceni et Rescriptum

Christiani)

『ムハンマドの系譜』(Liber generationis Mahumeth)

『サラセン人の物語』(Fabulae Saracenorum)

『ムハンマドの教義』(Doctrina Mahumet)

スペインから帰国した後、彼は、これらの翻訳とイスラームの教説について簡単な紹介を記し、イスラーム論駁の執筆を要望する書簡を、クレルヴォーのベルナルドゥスに送る⁽⁷⁾。さらに、『トレド集成』をもとに、イスラームの教説、ムハンマド(Muhammad 570頃-632年)の生涯を要約した『サラセン人の異端大要』を執筆する。

ベルナルドゥスがペトルスの要望に応じることはなかった。この時期、ベルナルドゥスは教会内の異端の断罪、すなわち、ブレシアのアルノルドゥス(Arnoldus de Brixia 1154年歿)の異端および南フランスのカタリ派の異端の断罪に精力を費やし、さらに1146-47年には第二回十字軍(1147-49年)の呼びかけのためにヨーロッパ各地を遊説する⁽⁸⁾。

他方、ペトルスはこうした軍事的な行動に加担することなく⁽⁹⁾、自らの手で『サラセン人の異端論駁』(Liber contra sectam sive haeresim Saracenorum)を執筆する。この二人の修道院神学者がイスラームに対して取った態度は、極めて対照的である。

2. 『サラセン人の異端大要』の本文

1 サラセン人ないしイシュマエル人の異端的、悪魔的な分派に関する大要は以下のとおりである。

まず、第一にそして最も呪うべき彼らの誤謬は、神性の一性における三性を否定すること、つまり、彼らは、一性における数多を遠ざけ、神性の一なる本質における位格の数が三であることを信じないことである。私の言う三つの

数、つまり、形あるものすべての根源と目標、形成された事物の原因・始源と終極を彼らは受け入れず、口では神を告白するけれども、実はまったく神を知らないのである。ところが、この迷える者たち、移り気な者たちは、万物の多様性と変化の根源としては、一性において二つの根源だけ、すなわち神的本質それ自体とその魂だけを認める。それゆえ、神を複数形で語ることはコーランが常に示すとおりである。このコーランと呼ばれるものが彼らの法であり、アラビア語では戒めの集成を意味する。

2 第二に、この盲目の者たちは、創造者である神が父だということを否定する。彼らによれば、いかなる者も性的な交わりなしに父となることはないからである。したがって、彼らは、キリストが聖霊によって懐胎されたことは信じるけれども、神の子であり神であることは信じない。[彼らにとって] キリストは、優れた預言者、虚偽と罪をことごとく免れた真実の預言者、マリアの子、父なくして生まれた者、決して死を味わうことのない者である。死は彼にふさわしくないからである。のみならず、ユダヤ人が彼を殺そうとした時も、その手から逃れて天に昇り、アンチ・キリストの到来まで、創造者の御前で肉体を伴って生きているのである。アンチ・キリストが到来すると、キリストは、その威力をもった剣によって彼を倒し、残りのユダヤ人を彼の法へと回心させることになろう。他方、キリスト者は、自らの離反あるいは使徒たちと弟子たちの死のために、彼の法と福音とを失ってから久しいことから、キリストは彼らにその法を完璧に教えることになろう。かくして、彼の法によって、すべてのキリスト者が、彼の最初の弟子たちのように救われることになろう。彼ら自身[サラセン人]が大天使として挙げるセラフィムがラッパを響かせると、キリスト自身も、彼らと全被造物と共にいったん死に、その後、他の者たちと共に復活し、その民を裁きの場に導き入れ、彼らのために助けの手を差し伸べ、彼らのために祈ることになるが、裁くことは決してない。というのも、神のみが裁くからである。他方、預言者たち、使者たちの各々は、彼らと共に

いて、また彼らのために執り成し手となり、助け手となろう。この上なく軽蔑すべき不敬虔なムハンマドは、このように彼ら〔サラセン人〕に教えたが、彼は、人間の救いの手段として最も有効なキリスト教信仰の秘跡をことごとく否定し、神のいかなる思し召しかは分らないが、聞いたこともない妄想の物語によって、人類のほぼ三分之一を悪魔と永遠の死に引き渡してしまったのである。

3 本集成を読もうとする人のためには、ムハンマドがいかなる人で、何を教えたのかを語っておくことも必要であろう。そうすれば、読んだことをより良く理解し、また彼の生活と教えがどれほど嫌悪すべきものであるかを理解できよう。確かに、ムハンマドとは最初の七人の助祭の一人であったニコラオ（使6：5）であり、「ヨハネ黙示録」が叱責するニコライ派の教説を奉じる分派は彼から生じ（2：6, 15）、それが今日のサラセン人の法となっている、と考える者たちもいる。また当てずっぽうに別の人物を挙げる者たちもいるが、彼らは、書物を調べようともせず、また歴史の出来事についても無知であり、何事でも同じように誤った見解を抱いているのである。

4 しかし、ローマの教会の図書係であったアナスタシウスによってギリシア語からラテン語に訳された年代記がこの上なく明確に語るところによると、ムハンマドは、皇帝ヘラクレイオスの時代、教皇大グレゴリウス1世の時代の少し後、つまり、五五〇年ほど前に、貧しい家のアラブ人として生れた。初めは、当時の他のアラブ人と同じく、古来からの偶像崇拝者で、学問らしい学問もほとんど知らなかったが、世俗の事柄には機敏で、相当に抜け目なく、卑しい素性と貧窮の中から、裕福な名士にのし上がっていった。このように出世していく中で、彼は近隣の人々、とりわけ彼の血縁者たちを、策略、強奪、襲撃によってしばしば傷つけ、時には密かに、時には公然と殺害し、彼に対する恐怖の念を増大させていった。こうして、さまざまな集まりでもしばしば彼が勝っていることが明らかになると、彼は民を支配したいと思うようになった。

5 けれども、一斉に抵抗する者たち、彼の素性の卑しさをなじる者たちが相手ではこうした手口で自分の野望を達成することができないと知ると、剣の力では何もできない以上、宗教という外衣をまとい、聖なる預言者の名で君臨しようとした。蛮族の中の蛮族、偶像崇拜者たちの中であって自らも偶像崇拜者として暮らし、いかなる民よりも神秘的な法と人間の法に無縁で無知な人々の中に暮らしただけ、彼らを簡単に誘惑できることはとうに承知していたので、自分が抱いていた邪悪な業を実行し始めたのだ。彼は神の預言者たちが偉大な人々であったことを聞き、自分は神の預言者であると語り、偽善を行ない、彼らを偶像崇拜から引き離れたが、しかし、真の神に導くのではなく、あらかじめ自分が企てていた異端の奸計に陥れようと努めたのである。

6 とかくする内に、「人の子らの上になさる計画において恐るべき方」(詩65:5)、「憐れみたくと思う者を憐れみ、かなくなりたいと思う者をかたくなにされる方」(ロマ9:18)の思し召しにより、サタンがこの邪悪な企みを成功へと導いた。サタンは、教会から追放された異端者ネストリウスの追隨者である修道士セルギウスをかのアラビア地方に送り込み、異端の修道士と偽預言者を結び付けたのである。こうしてムハンマドと結託したセルギウスは、前者に欠けていた点を補った。すなわち、われわれの救い主が神であることを否定した彼の師ネストリウスの解釈に従い、あるいは自己流の理解によって旧約聖書と新約聖書を説明し、同時に外典の中の作り話をたっぷりと教え込み、ムハンマドをネストリウス派のキリスト教徒に仕立て上げたのである。

7 満ち溢れる邪悪がことごとくムハンマドに注ぎ込むように、そして彼と他の人々が破滅するために彼に不足の点があつてはならないと、ユダヤ人もこの異端に結び付けられた。ユダヤ人は、彼が真のキリスト教徒にならないようにと密かに準備していたので、聖書の真理ではなく、彼らが今日もなおふんだんに持っている作り話を、新奇なことに渴望するこの男に吹き込んだ。こうして、ムハンマドは、ユダヤ人と異端者という何とも優れた教師たちの手助けに

よってコーランを起草し、ユダヤ人たちの作り話と異端者たちの呪詛からなる邪悪な書物を、彼一流の野蛮な仕方でも編んだ。そして、すでに聖書からその名を知っていたガブリエルが、それらを少しずつ彼に告知したと偽り、神を知らない人々に致命的な毒をもった。つまり、杯の縁に蜂蜜を塗った後に致命的な毒を注ぎ、可哀相に、憐れむべき人々の魂と肉体を片づけたのである。

8 事実、この不敬虔な男がしたことは、キリスト教とユダヤ教の掟を誉め上げながら、そのどちらをも守ってはならないと断言することである。つまり、この非難すべき男はそれらを認めながらも、拒絶するのである。それゆえ、モーセは最良の預言者であり、主キリストは全てのものにまさって優れた方であったと断言し、処女から誕生したと語り、また神の使者、神の言葉、神の霊であると告白するけれども、それは私たちが理解し告白する意味での使者、言葉、霊なのではない。神の子として語られ、信じられていることについては、徹底的に嘲笑した。さらに、この大馬鹿者は、神の子の永遠の生誕を人間の誕生と比較し、神が生むこともできたし、生まれることもできたことを、力の限り否定し、愚弄する。肉体の復活については繰り返す述べ、世の終わりにおけるすべての裁きは否定しないけれども、それがキリストではなく神によって執行されることになっている。ところが、かの審判においては、万物の中で神につぐ最高の者としてキリスト、そして彼自身がその民を助けるために陪席するという狂気の発言をしているのである。

9 地獄の責め苦については、いかにも偉大な偽預言者が思いつきそうな、自分の好みに任せた記述である。天国は天使的な交わりでも、神の直視でも、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしない」（1コリ2：9）かの最高善でもなく、肉と血の、いや肉と血の残滓が渴望するままの天国、自分本位の天国を描いた。そこでは肉とあらゆる種類の果実を食べることができ、また乳と蜜の小川、輝く水の小川が流れ、この上なく美しい女たちと乙女たちによる抱擁と快樂がある。彼の描く天国は以上に尽き、彼はこれらを

自分の追従者に約束したのである。以上の中には古来の異端の残滓がほとんどすべて含まれており、悪魔から教え込まれたこれらのことを、彼は反芻した。そしてサベリウスと共に三位一体を拒絶し、ネストリウスにならってキリストの神性を拒否し、また主の昇天は否定しないが、マニ教徒と共に主の死を否定したのである。

10 益をもたらすのではなく、破滅のための事柄、あるいはそうした類の事柄を人々に教え込むことにより、彼は人々を完全に神から離反させ、また福音の言葉が彼らの内にこれ以上場を占めることがないように、キリストと福音についてすべてを知っている者たちから遠ざけるかのように、彼らの心の入口を不敬虔という鉄壁の障害物で塞いでしまった。これに加えて、彼らの民の父祖であるイシュマエルが施したように、割礼を遵守するよう命じた。しかし、何をさておいても、肉的な思いに囚われた人々をできるだけ自分に引き付けることができるようにと、食い道楽と性的欲望の手綱を緩めた。彼自身も同時に十八人の妻をもち、さらに神のお告げと称して、他の多くの人妻たちと姦淫を行ない、預言者の模範と称しては数多くの破滅的なことに身を任せた。けれども、こうしたすべての素行のゆえに不道徳と見られるようなことがあってはならないと、喜捨と何らかの憐れみの業に励むよう命じ、祈祷を誉めちぎった。それゆえ、甚だ奇怪なことだが、ある人が言うように、「人間の頭に馬の頸と、鳥の羽根を」(ホラティウス『詩論』 1:1-2) つないだのである。彼は上述の修道士とユダヤ人たちの説得によって偶像崇拜を全面的に放棄し、また彼自身が説得に成功した人々にも、多数の神々を棄てて一人の神を崇拜すべきであると説いたので、野蛮で無知な人々にとってはこれまで耳にしたこともないようなことを語る人だと思われた。しかも、その説教が彼らの意に沿ったので、彼はまずこの人々によって神の預言者であると信じられた。

11 やがて時の経過と共にこの誤謬が広がると、彼は、人々によってかつて自分が望んだ王の位に担ぎ上げられた。こうして彼は善と悪とをない交ぜにし、

真理と誤謬を混同し、誤謬の種を撒き散らしたが、その一部は彼の在世中に、そして一部はとりわけ彼の死後に、永遠の火によって焼き尽くされるべき穀物の実りをもたらすことになったのである（マタ13:40）。

さて、ローマ帝国が衰微し、いや壊滅状態に瀕すると、ただちに、「わたしによって王たちが君臨する」（箴8:15）と語られた方の許しによって、この疫病によって汚染された、アラビア人ないしサラセン人の帝国が勃興した。この帝国は、武力によってアフリカ全土およびイスパニアの一部分と共にアジアの大部分を徐々に占領し、服属する者たちを支配すると同時に、この誤謬をも移し入れたのである。

12 彼らは、私たちと同じことを信じているところもあるが、多くの点で私たちとは一致しないことから、私はこの者たちを異端者と呼んでいるけれども、むしろもっと強く、不信仰者、異教徒と呼ぶほうが適切かもしれない。というのも、彼らは、真の神について幾らかは語るけれども、多くの誤ったことも述べ、また洗礼、聖餐、告解ないしキリスト教の秘跡を共有することはなく、こうしたことはこの異端以外にはなかったことだからである。

13 実際、この異端の究極的な意図は、主キリストが神に愛された偉大な者、純粋な人、そして知者、最大の預言者ではあっても、神であり神の子であると信じられることは阻止するというところにある。確かに、こうしたことは、かつて悪魔の奸計から生じ、まずアリウスによって種が播かれ、ついでこのサタンすなわちムハンマドによって生まれ、最後にアンチ・キリストを通して、悪魔が意図した通りに完成されることになろう。聖ヒラリウスはアンチ・キリストの起源がアリウスにあったと述べるが（『三位一体論』VI,46）、キリストが真の神の子であることを否定し、被造物だと唱えることによってアリウスが言い出したことを、アンチ・キリストが、キリストは決して神でも神の子でもなく、善なる人ですらないと主張することによって完成するだろう。そこで、この上なく不敬虔なムハンマドはこの両者の中間に位置するよう悪魔によって案

配され、準備されたように思われる。つまり、彼は多少ともアリウスを補い、さらに邪悪な事柄を説こうとねらうアンチ・キリストにとっては、不信仰な人々の魂の中でも最大の糧となったのである。

14 確かに、このような人類の敵に対抗するすべは、私たちが敬虔へと強く促す神の受肉の信仰をほかにしてはならない。聖霊の恵みが働き、天上の秘跡によって新たにされた私たちは、この敵が私たちを追放したことを誇りとしたかの地、すなわち、私たちの王と祖国を直視することを希望している。王であり創造者である神御自身が私たちの流謫の地に降りて来られ、私たちを憐れみ深く呼び戻されることによって、再び御許に帰ることを希望しているのである。かの敵は、この憐れみと神的な配剤への信仰と愛を人間の心から消し去るべく世の始めから虎視眈々とねらっていた。教会が誕生し始めたさいにも、この敵は、もし当時それが神から許されたならば、後に神の許しによってあの最も不幸な民衆〔サラセン人〕を誘惑したのとほぼ同一の手口で、極めて巧妙にこの信仰を根こそぎにしようと試みたであろう。

15 さて、聖アウグスティヌスが述べていることによると、哲学者ポルフェリオスは、恥知らずにもキリスト教から背教した後にキリスト教を攻撃するために著した書物において、神託に伺いを立て、キリストが何者であるかを尋ねたことを記している。ダエモンが彼に告げた答えは、キリストは確かに善なる人であったけれども、彼の弟子たちは、彼に神性を帰属させ、彼が自分自身について語らなかつたことを捏造し、重い罪を犯したというものであった（『神の国』XIX, 23）。この見解は、ほとんど同じ言葉で、〔トレド集成に含まれた〕物語にも見出せる。それにしても、悪魔はいかに周到であったことか。彼はキリストについて何ほどか善いことを語るけれども、それは、もし悪口ばかりを言い立てたら、自分を信じてもらえないことを承知していたからである。何よりもキリストのうちに人間を救う神性があることが信じられていない以上、悪魔はキリストについて考えられていることを一顧だにすることはないのであ

る。もしこのことをさらに十分に理解したいと望む人がいるなら、この教父アウグスティヌスの『神の国』の第十八巻と第十九巻および『福音書の一致』第一巻を読んでいただきたい。そうすれば、熱心で優れた才能をもった人は、悪魔が実行を画策したけれども、許されなかったこと、さらには神の隠された思し召しによって許され、悪魔がこの最も哀れな民だけに思うがままに行なったことがどのようなことかを確実に知るであろう。

16 さて、ここに書かれたような物語は、悪魔自らの手助けがなければ、死すべき者が捏造することなどは到底できなかつたものだが、多くの笑うべき、狂気の妄想はさておいても、これらによって何よりもサタンがやり遂げようと目論んだのは、主キリストが神の子、真の神、人類の創造者、贖い主であることを、信じられないようにすることであった。実際、サタンがポルフェリオスによって説得しようとしたことは事実だが、しかし、神の憐れみにより、まだ聖霊の最初の賜物に熱くたぎっていた当時の教会から、悪魔は追い払われたのである。結局、悪魔は、この上なく恥ずべきかのムハンマド、多くの人の証言によると、取り憑かれた男、狂った男であるムハンマドをいわば自分に最適の手段、道具として利用し、哀れなるかな、大部分の人々、地上のほぼ半分と数えられる人々を自分と共に永遠の滅びに沈めたのである。どうして彼にそれが許されたのか、それは、「なぜあなたはそのようなことをなさるのですか」(マタ20: 16)と誰も言うことができない方、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」(同22: 14)と語った方のみが御存じである。

17 それゆえ、私がこれらのことを手短かに語ったのは——冷静に論じるというより、かなり激しているが——[この集成を]読む人が理解できるように、また、もしこの異端のすべてに対して執筆しようと思ひまたそれをできる人がいるならば、その人はいかなる敵と戦おうとしているのかを知ることができるように、と考えたからである。おそらく、主に励まされた人がいつか現れ、多大な恥辱に苦しめられている神の教会を解き放つことになろう。というのも、わ

れわれの時代に至るまで、神の教会は、新旧とりまぜあらゆる異端に応じて反駁してきたけれども、他のすべての異端以上に人間の体と靈魂を計り知れない敗北へと引き渡したこの異端に対してのみ、何も答えなかつただけでなく、それがどれほど忌まわしく、またどこから生じたのかをうわべだけしか調査しようとしなかつたからである。

18 こうしたわけで、聖なるクリュニー教会の卑しい修道院長である私ペトルスは、イスパニアにあるわれわれの所領を訪れた際に、この不敬虔な分派の全貌およびこの分派を起こした不敬虔な人物の呪うべき生涯を、多大な努力と犠牲を払ってアラビア語からラテン語に翻訳させ、それらをありのままに知ることができるようにしたのである。そうすれば、この異端がどれほど汚れ、無価値かを知り、聖靈の炎に駆り立てられた神の僕が現れ、この異端に対して反駁を執筆するだろうと期待したからである。しかし、悲しいかな、こうした聖なる熱意の熱い炎は教会のどこにもほとんど見られず、それに着手しようとする人もなかつた。私は首を長くして待ったが、口を開き、キリスト教への聖なる熱意によってペンを動かし、力強い言葉を発する者はいなかつた。そこで、私が担っている責任ある職務が許す限りで、神の援助により、私自身でこれに着手することを決心した。しかし、誰か他の人が私よりも優れた形でこの課題を果たしてくれるならば、感謝したいと常日頃思っているしだいである。

3. 『サラセン人の異端大要』の解説

本書は、「サラセン人 (Saraceni) ないしイシュマエル人 (Ismaelitae) の異端的、悪魔的な分派に関する大要は以下のとおりである」(1節) という言葉で始まる。中世ヨーロッパにおいて、ムスリムはもっぱらサラセン人と呼ばれていた⁽¹⁰⁾。この呼称は、本来、アラビア半島北西部およびシナイ半島の遊牧民族を指していたが、四世紀以後、アラブ人を意味するようになった。その正確な語源は不明であるが、中世ヨーロッパにおいてはアブラハム (イブラーヒー

ム)の妻サラと関連させる説が流布した。しかし、イスラームでは、アブラハムとサラのあいだに生れた長子イサク(イスハーク)よりも、むしろアブラハムと女奴隷ハガルとのあいだに生れたイシュマエル(イスマーイル)を優先する。『コーラン』によると、彼はアブラハムの長男であり、アラブ人の祖先とされ、また父アブラハムと共に、カアバ神殿の基礎を築き(コーラン2:125-129)、使徒であり預言者でもあった(同3:84, 4:163, 19:54)。それゆえ、ペトルス・ウェネラピリスは、イスラームを「サラセン人ないしイシュマエル人」と呼ぶ。

本書の構成は、1-2節 イスラームの神学的誤謬、3-12節 ムハンマドの生涯とその教説、11節 イスラームの拡大、12-16節 この異端の意図、17-18節 この異端を論駁することの必要性、となっている。

以下、ペトルスの報告に基づき、イスラームの(1)三位一体論、(2)キリスト論、(3)秘跡論、(4)終末論、そして最後に(5)ムハンマドの生涯と『コーラン』の成立を取り上げ、解説する。

(1) 三位一体論

ペトルスがイスラームの神学的誤謬として最初に挙げるのは、イスラームによるキリスト教の三位一体論の否定である(1節)。

神の唯一性とそれへの信仰(tawhīd)を主張するイスラームにおいて、多神崇拝(shirk)は、不信仰(kufr)の最たるものである。『コーラン』に「アッラーは、(何ものをも)かれに併置されることを赦されない。それ以外のことに就いては、御心に適う者を赦される」(4:48)と述べられているとおりである。ペトルスも「(ムハンマドは)多数の神々を棄てて一人の神を崇拝すべきであると説いた」(10節)と述べ、イスラームが唯一神を奉じる宗教であることは認める。

ところが、このイスラームは「神性の一性における三性を否定する」(1

節)と述べられているとおり、キリスト教の三位一体論を否定する。『コーラン』は次のように述べる。「啓典の民よ、宗教のことに就いて真実以外のことを語ってはならない。マルヤム(マリア)の子マスィーフ・イーサー(キリスト・イエス)は、只アッラーの使徒である。マルヤムに授けられたかれの御言葉であり、かれからの霊である。だからアッラーとその使徒たちを信じなさい。『三(位)』などと言ってはならない。止めなさい。それがあなたがたのためになる。誠にアッラーは唯一の神であられる。かれに讃えあれ。かれに何で子があろう。天にあり、地にある凡てのものは、アッラーの有である。管理者としてアッラーは万全であられる」(4:171)。イスラームはキリスト教の三位一体論を三神論・多神崇拜と誤解したのである。

また、本書では触れられていないが、イスラームは三位一体論における父・子・聖霊という三位格(hypostasis, persona)を父・母・子と誤解する。すなわち「マルヤムの子イーサーよ、あなたは『アッラーの外に、わたしとわたしの母とを二柱の神とせよ。』と人々に告げたか。かれは申し上げた。『あなたに讃えあれ。わたしに権能のないことを、わたしは言うべきではありません……』」(5:116)と述べられている。ムハンマドのキリスト教に関する知識がどのようにして得られたかは、具体的には不明である。しかし、彼の妻ハデージャの従兄弟ワラカ(Waraqqa)は、ムハンマドが布教を開始する以前のキリスト教徒であり、イスラームに改宗することなく生涯を終えた。したがって、ムハンマドは決してキリスト教的な環境とは無縁ではなかった。

さて、ペトルスは、イスラームが唯一神信仰を標榜するにもかかわらず、「一性において二つの根源だけ、すなわち神的本質それ自体とその魂だけを(ipsam divinam essentiam et eius animam)認める」(1節)と述べる。この記述はイスラーム神学(kalām)における『コーラン』の創造説と非創造説に関連づけることができるかもしれない^[11]。9世紀に登場したムータジラ派(al-Mū'tazila)は、理性を真理の標準とした合理主義の立場に立ち、極端なまでに

神の唯一性を主張し、あらゆる神の属性を否定した結果、一般には永劫の昔から神と共に存在したと信じられていた神の言葉としての『コーラン』も神によって創られた被造物の一つであると主張した。これに対し、ムータジラ派から転向し、思弁神学の方法を活用しながらも伝統的信仰を擁護し、正統神学の基礎を築くアシュアリー (al-Asha'ri 837/4-935/6年) は、コーラン非創造説を弁護し、さらにアシュアリー派 (al-Ashā'ira) は、その言語分析に基づいてこれを擁護する。すなわち、言語には音声や文字による表現という側面があるが、この点からすると、書物として書かれたもの (kitab) としての『コーラン』は被造物である。しかし、言語にはこうした言語表現から独立した話者の「魂の対話」(hadīth al-nafs) 「魂の言葉」(kalām nafsi) という側面もある。『コーラン』が永遠であるという場合、それは神の本質に内在する神の言葉という神的属性を意味しており、その点で『コーラン』は創造されたものではない。ここに神の本質と属性としての魂ないし言葉の区別が生じる¹²⁾。ベトルスが「神的本質それ自体とその魂」と言う場合、その背景にはこうした事態があったと思われるが、むしろ、彼の知識の源泉は『サラセン人とキリスト教徒の往復書簡』——これについては後述する——であるから、この論争の詳細について、彼が知っていたということはない。

さらにベトルスは、イスラームが厳密には唯一神信仰ではないことを示すために「神を複数形で語ることはコーランが常に示すとおりである」(1節)と指摘する。確かに、『コーラン』において神が一人称で語る場合には、「われら」という表現を用いるが¹³⁾、これは神がその威厳を示すために用いる表現法であり、決して神の複数性を示しているのではない¹⁴⁾。また、彼は『コーラン』の名称についても、「アラビア語で戒めの集成を意味する」(ex Arabico collectio praeceptorum) とするが、これは、ケトンのロベルトゥスの誤解に基づいている¹⁵⁾。『コーラン』の本来の意味は、「読誦されるもの」である。

(2) キリスト論

ペトルスが報告するとおりの(2, 8, 14, 15節), 『コーラン』は、イエスが神の子であることを否定し、したがって、その受肉、贖罪、復活を否定する。しかし、イエスが聖霊によって懐胎され、処女マリアから罪なくして生れ、優れた預言者・使徒であることは認めている(『コーラン』19: 16-33)。

ところで、イエスの死についてペトルスは、キリストが「決して死を味わうこともない者」「ユダヤ人が彼を殺害した時も、その手から逃れて天に昇った」とされていると報告する(2節)。実際、『コーラン』は、『わたしたちはアッラーの使徒、マルヤムの子マスィーフ(メシア)、イーサーを殺したぞ』という言葉のために(心を封じられた)。だがかれらがかれ(イーサー)を殺したのでもなく、またかれを十字架にかけたのでもない。只かれらにそう見えたままである。……確実にかれを殺したというわけではなく。いや、アッラーはかれを、御側に召されたのである(4: 157-158)と述べている。

十字架にかけられたイエスが実は本当のイエスではなかったとする説は、1世紀後半から2世紀初頭のユダヤ人キリスト教徒の異端者でグノーシス的傾向をもったケリントス(Cerinthos)や、2世紀前半以降、パレスチナのヨルダン川東部に存在したユダヤ・キリスト教の異端エビオン派(Ebionaei)に見出される¹⁶⁾。さらには、キリストにおける神性と人性の位格を区別するネストリオス派(Nestoriani)が、5世紀末にはペルシアに七つの主教座を持ち、またアラビアにも主教座を持ち、東方世界においてかなりの勢力を有していた。ムハンマドがキリスト教の知識を得る環境にあったことは上述したが、彼が得た知識の中にこうした思想が入り込んでいたことは十分に考えられよう¹⁷⁾。

(3) 秘跡論

秘跡については、「彼らは、人間の救いの手段として最も有効なキリスト教信仰の秘跡をことごとく否定する」(2節)「洗礼、聖餐、告解ないしキリスト

教の秘跡を共有することはなく、こうしたことはこの異端以外にはなかった」（12節）と述べられている。しかし、その信仰生活・慣習について、ムハンマドは「喜捨 (eleemosynae) と何らかの憐れみの業に励むよう命じ、祈祷 (orationes) を誉めちぎった」（10節）と述べられている。これは、イスラームにおける「五行（五柱）」(al-arkan al-khamasa) と呼ばれる個々の信者の負う義務、すなわち、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼のうちの礼拝 (salāt 『コーラン』 2 : 238; 4 : 103; 11 : 114; 17 : 78; 20 : 170; 30 : 17-18) と喜捨 (zakāt 同 2 : 43; 9 : 60; 58 : 13; etc.) の二つであることは言うまでもない。またペトルスは、割礼の遵守についても触れている（10節）。

（４）終末論

終末論に関して、ペトルスはイスラームにおけるアンチ・キリスト (Anti-christus) の到来とキリストの再臨について言及する（2節）。キリスト教において、終末時に登場し、キリストそして神に対抗する存在であるアンチ・キリスト（1ヨハ2 : 18; 22; 4 : 3 ; 2ヨハ7）¹⁸に対応するのが、イスラームにおいてはダッジャール (al-Dajjāl)¹⁹である。ダッジャールという語はアラム語であり、シリア語の偽メシア・偽キリストを意味する 'meshiha daggala' とも対応する。このダッジャールについて、『コーラン』は何も語らないが、イスラームの伝承で語られており、終末の前兆としてこの世に現れ、人々を背教へと誘惑するが、再臨したイエスによって処刑されることになっている。ペトルスがここで述べるのもこうした民間伝承である。

ついで、ペトルスは終末の裁きにおける預言者ムハンマドの執り成しに言及する。『コーラン』は「あなたは主に召されることを恐れる者に、それ（クルアーン）によって警告しなさい。かれ（アッラー）の他にかれらを愛護するもの、執り成すものもないのである」（6 : 51）と述べ、アッラーの神以外の執り成し手を否定しているが、一般には、最後の審判におけるムハンマドの執り

成しが信じられており——ただし、ムータジラ派は否定する——上述のアシュアリーを初めとする正統神学はこれを認め、罪を犯した人は一度は地獄の劫火で焼かれるが、ムハンマドの執り成しによって火中から救い出されると主張している²⁰。

第三に、天国と地獄についてだが、ペトルスは、イスラームの地獄観についてはほとんど述べないが、天国については、キリスト教の天国が「天使的な交わり」(societas angelicae)「神の直視」(visio divinae)であるのに対して、イスラームのそれが著しく官能的であることを強調し、「そこでは肉とあらゆる種類の果実を食べることができ、また乳と蜜の小川、輝く水の小川が流れ、この上なく麗しい女たちと乙女たちによる抱擁と快樂がある」(9節)と述べている。事実、『コーラン』の描写する天国は、例えば「信仰して善行に勤しむ者たちには、かれらのために、川が流れる楽園に就いての吉報を伝えなさい。かれらはそこで、糧の果実を与えられる度に、『これはわたしたちが以前に与えられた物だ。』と言う。かれらには、それ程似たものが授けられる。また純潔の配偶者が授けられ、永遠にその中に住むのである」(2:25)とあるように官能的であり、これに類した箇所も多い (cf. 3:15, 37, 42ff; 44:54; 52:20)。加えて、『コーラン』のラテン語翻訳者ケトンのロベルトゥスは、『コーラン』の何でもないような箇所ですら、猥雑な意味を含めて訳し、意図的な誇張を行なった²¹。それゆえ、キリスト教がイスラームを批判する場合、しばしばこの天国観が組上に載せられることになる。

(5) ムハンマドの生涯と『コーラン』の成立

ペトルスは、ムハンマド(570頃-632年)の生涯を略述するにあたり、最初に、イスラームがニコライ派から生じたという説を斥ける(3節)。この分派は、エイレナイオスに拠ると、エルサレムのキリスト教共同体の「食事の世話」をするために選ばれた七人のギリシア語を話すユダヤ人の内の一人「改宗

者ニコラオ」(使6:2-5)を創始者とし、「ヨハネ黙示録」が断罪する者たちである(黙2:6, 15-16)。なぜなら、彼らは「姦通しても構うことなく、偶像に捧げられた肉を食べることを教える」(nullam differentiam esse docentes in moechando, et idolothyum edere)からである²²⁾。中世においても、彼らは淫らな行為に耽った者たちとして伝承されている²³⁾。ペトルスは、ムハンマドが「十八人の妻をもち、……他の多くの人妻たちと姦淫を行なった」(10節)と述べ、キリスト教の側からすれば性的放縦と見なされる彼の行為を非難する。しかし、イスラームをニコライ派と見なす人々については、「彼らは、書物を調べようとせず、また歴史の出来事についても無知であり、何事でも同じように誤った見解を抱いているのである」(3節)と痛烈な非難を浴びせる。

これに対して、ペトルスがムハンマドの生涯とその教説に関して依拠するのは、『トレド集成』であり、またビザンツの年代記作者であった証聖者テオファネス(Theophanes Confessor 760頃-818年)が執筆し、ローマの図書係であったアナスタシウス(Anastasius Bibliothecarius 879年頃歿)がラテン語に翻訳した『年代記』(Chronographia)である。

後者に基づいて、ペトルスはムハンマドの誕生を「皇帝ヘラクレイオスの時代、教皇大グレゴリウス1世の時代の少し後、つまり、五五〇年ほど前」(4節)とする。ビザンツ皇帝ヘラクレイオス(Herakleios)の在位は610-41年、ローマ教皇グレゴリウス1世(Gregorius I)の在位は590-604年である。ムハンマドが実際に生れたのは570年頃であるが、多少のずれは致し方なからう。続くムハンマドの幼年時代から預言者(偽預言者)として登場するまでの記述(4-7節)は、虚実が織り交ぜられ、史的ムハンマドの姿とは必ずしも一致しない。

しかし、この中で注目すべき点は、ムハンマドがネストリウス派の異端修士セルギウス(Sergius)から異端思想を吹き込まれたという報告である。ペトルスが依拠しているのは、『トレド集成』に含まれている『サラセン人とキ

リスト教徒の往復書簡』である。これは、9世紀頃にアラビア語で著わされたキリスト教の側の護教論で、ムスリムのアル・ハーシミー (Al-Hāshimī) とキリスト教徒アル・キンディー (Al-Kindī) という二人の架空の人物によって交わされた往復書簡の形式をとっている²⁴⁾。この中でアル・キンディーは、『コーラン』がユダヤ教と異端的なキリスト教の影響を受けたと論じ、異端的教師として修道士セルギウスの名を挙げる。すなわち、「修道士セルギウスは、修道院で重い罪を犯したため破門、追放された後、ティハーマ地方まで来て、さらにメッカに下った。そこには二つの民、つまり偶像崇拝者とユダヤ人が住んでおり、そこで彼は、偶像を崇めていたムハンマドを見出した」²⁵⁾と述べる。

この伝説の淵源は、『コーラン』の「われは、かれらが、『かれ (ムハンマド) に教えるのは、只の人間である』と言うのを知っている。だがかれらの頼るものの言葉は、外国語であるが、これは純粹明確なアラビア語である」(16:103) という一節にある。ムハンマドには彼を教えた教師がいるという批判に対する反論を述べている箇所である。しかし、ここからイスラームの側でも『バヒーラ物語』という伝説が生れる。これは、ムハンマドがまだ12歳の時に、彼の伯父であり保護者でもあったアブー・ターリブ (Abū Talīb) の隊商に加えられてシリアに赴いた際、バヒーラ (Bahīra) という隠修士が、ムハンマドはやがて預言者となることを予見したという物語である。これがキリスト教の側でも改変され、ムハンマドを教えた異端教師という様々な伝説が生み出される。その教師は、ネストリウス派とされる場合もあれば、アレイオス派、ニコライ派とされる場合もあり、また彼の名前もセルギウス、ニコラウスあるいは無名の場合もある²⁶⁾。

いずれにせよ、ネストリウス派の修道士セルギウスの異端的な教え、それにユダヤ人の「作り話」(6節)が加わることによって成立した『コーラン』は「古来の異端の残滓がほとんどすべて含まれた」(9節)書物であるとペトル

スは断じ、ムハンマドが預言者であること、そして『コーラン』の啓示の真正性を否定するのである。

結語

以上、五つの点に限定して、ペトルス・ウエネラビリスのイスラームに関する報告を検討した。今日のイスラーム理解からすると、そこには正確な報告と同時に多くの誤解が含まれていることも否定できない。何よりも、彼は、イスラームをキリスト教と異なる宗教というよりもキリスト教の異端として捉え一多少のとまどいがあるとは言え（12節）—その観点を抜け出すことはできなかった。にもかかわらず、ペトルス・ウエネラビリスは、イスラームを軍事的・政治的勢力としてではなく、宗教運動として捉えようとした最初の西欧人であった。R. W. サザーンは、古典的な名著『ヨーロッパとイスラム世界』において、ペトルスの時代を「理性と希望の時代」と呼ぶ。この時代は、理性に基づいて諸宗教の平和と統一とが達成できるという希望を抱いた時代である²⁷⁾。

イスラームの個々の教説に関するペトルス自身の反論、論駁については、彼の『サラセン人の異端論駁』を繙く必要があるが、これについては、別の機会に譲らなければならない²⁸⁾。しかし、最後に、この書の一節は引用しておくべきだろう。「私はあなたがたに切に願います。どうか（イスラームには）われわれのうちの有人々々がしばしば行なうように、武器に訴えるのではなく、言葉によって、武力ではなく理性によって、憎悪からではなく愛をもって対して頂きたい」²⁹⁾。この言葉は、現在もなお重い意味をもっている。

注1) テキストには、Petrus Venerabilis, *Schriften zum Islam* (Corpus Islamo-Christianum Series Latina I), Ediert, ins Deutsche übersetzt und kommentiert von R. Gleis, Altenberge 1985 pp. 3-29 所収の校訂版を使用し、また J. Kritzeck, *Peter the Venerable and Islam* Princeton 1964 pp. 204-211 所収のテキストも参照した。なお、本稿で『コーラン』を引用する際には、『日亜対訳・注解

- 聖クルアーン』日本ムスリム協会（1982年）を用い、章節の番号もそれに拠る。また『聖書』の訳文は『新共同訳 聖書』日本聖書協会（1987年）に従い、各書の略号もそれに拠る。
- (2) ベトルス・ウェネラビリスの生涯については、cf. R. Gleib, *op. cit.*, pp. XI-XIV, p. XI, n. 1.
- (3) ベトルス・ウェネラビリスの『サラセン人の異端大要』について扱った邦語文献としては、柏木英彦『中世の春——十二世紀ルネサンス』（創文社 1976年）pp. 168-198『西洋中世とイスラム——ベトルス・ウェネラビリス』がある。著作の邦語訳としては、『書簡集』須藤和夫訳、『奇跡について』杉崎泰一郎訳（部分訳）が『中世思想原典集成 7 前期スコラ学』古田暁編訳 | 監修（平凡社 1996年）pp. 642-699 に収録されている。『書簡集』には、アベラルドゥスの死後、ベトルスがエロイズに宛てた美しい『書簡115』が含まれている。また『奇跡について』に関しては、同訳者による「奇跡物語にみる中世の世界観」（『中世思想研究』XLI（1999）pp. 67-75 も参照のこと。
- (4) トレドの翻訳活動については、cf. Marie-Thérèse d'Alverny, "Translations and translators," in *Renaissance and Renewal in the Twelfth Century*, ed. R. L. Benson and G. Constable, Harvard 1982; rep. Toronto 1991 pp. 421-62. 特に pp. 444-457.
- (5) この五人については、cf. J. Kritzeck, *op. cit.*, pp. 51-69. またダルマティアのヘルマヌスについては、cf. C. Burnett, "Hermann of Carinthia," in *A History of Twelfth-Century Western Philosophy*, ed. P. Dronke, Cambridge 1988 pp. 386-404.
- (6) これらの五つの翻訳については、cf. Kritzeck, *op. cit.*, pp.73-112. また、『コーラン』の翻訳については、cf. Marie-Thérèse d'Alverny, "Deux traduction latines du Coran au Moyen Age," in *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen age* 78 (1948) pp. 69-131.; L. Hagemann, "Die erste lateinische Koranübersetzung-Mittel zur Verständnis zwischen Christentum und Muslimen im Mittelalter?," in *Orientalische Kultur und europäische Mittelalter* (Miscellanea Mediaevalia, Bd. 17), ed. A. Zimmermann / I. Craemer-Ruegenberg, Berlin-New York 1985 pp. 45-58.; *Christentum contra Islam*, Darmstadt 1999 pp. 29-36 (L. ハーゲマン『キリスト教とイスラム——対話への歩み』八巻和彦・矢内義顕訳 知泉書館 2003年 pp. 46-58) .
- (7) この書簡 (Ep. 111) のテキストは、*The Letters of Peter the Venerable*, vol. I, ed. G. Constable, Harvard 1967 pp. 274-299 に収録されている。また本書全体全体の分析については、cf. G. R. Knight, *The Correspondence between Peter the Venerable and Bernard of Clairvaux: A Semantic and Structural Analysis*, Ashgate 2002 pp. 101-154, 特に pp. 144-151.
- (8) 第二回十字軍のための遊説（1146-47年）など、クレルヴォーのベルナルドゥスの十字軍に関する一連の活動・著作については、cf. P. Dinzelsbacher, *Bernhard von Clairvaux: Leben und Werk des berühmten Zisterzienser*, Darmstadt 1998 pp. 284-335.
- (9) クリュニー修道院およびベトルス・ウェネラビリスが十字軍に対してとって態度については、cf. D. Iogna-Prat, *Order and Exclusion: Cluny and Christendom, Face Heresy, Judaism, and Islam (1000-1150)*, tr. G. R. Edwards, Cornell University Press 2002 pp. 323-336.
- (10) cf. *Lexikon des Mittelalters* VII, München 2002 pp. 1375-1377 'Saraenen'. 例えば、セビリヤのイシドルス (Isidorus 560頃-636年) は『語源論』(Etymologiae) において次のように説明している。「サラセン人と呼ばれているのは、彼らがサラの子孫であると公言しているからである。あるいは、彼らはシリア人の出身である、と異邦人が言っていることからすると、シリギナエ (シリア出身者) がなまったものかもしれない。彼らは広大な荒地に居住している。彼らは、『創世記』が教えるように (25: 12-17), イシュマエルを祖とすることから、イシュマエル人である。彼らの祖先はイシュマエルの子ケゲルである。したがって、彼らはハガルから出たハガル人である。だが、彼らはサラから生れたことを誇りとしているために、上述のように、サラセン

- 人という誤った名称で呼ばれているのである。」(Saraceni dicti, vel quia ex Sara genitos se prae-dicent, vel sicut gentiles aiunt, quod ex origine Syrorum sint, quasi Syriginae. Hi peramplam habitant solitudinem. Ipsi sunt et Ismaelitae, ut liber Geneseos docet, quod sint ex Ismaele. Ipsi Cedar a filio Ismaelis. Ipsi Agareni ab Agar; qui, ut diximus, perverso nomine Saraceni vocantur, quia ex Sara se genitos gloriantur. IX, 2, 57). テキストは, San Isidoro de Sevilla, *Etiomologias I. Texto Latino, Version Española y Notas* por J. O. Reta y M-A. M. Casquero, *Introduccion General* por M. C. Diaz y Diaz, Madrid 1982 に拠る。ここで, イシドルスはサラセン人の語源をサラから導き出す説を述べると共に, 「シリギナエ (シリア出身者)」(Syriginae) がなまったものという説を紹介している。また, サラの子孫であることとイシュマエルの子孫であることとの矛盾を「彼らはサラから生まれたことを誇りとしている」からであると説明している。また, イシドルスがここで述べるように, 中世においては, サラセン人 (Saraceni) ではなく, ハガル人 (Agareni) と呼ぶべきであるという主張も生じた。この点については, cf. N. Daniel, *Islam and the West: The Making of an Image*, Oneworld 1993, 1997 p. 100.
- (11) J. Kritzeck, *op. cit.*, pp. 118-119. ただし, ダルベルニーは, これをアラブのネオ・プラトニズムに関連づける (cf. M.-Th. D'Alverny, *op. cit.*, pp. 101-102). いずれにせよ, 「コーラン」それ自体には含まれていない思想である。
- (12) 以上の点に関して詳しくは, cf. 中村廣治郎『イスラームの宗教思想——ガザリーとその周辺』(岩波書店 2002年) pp. 141-170. なお, キリスト教の場合, 「言葉」(Logos, Verbum) の被造性と非被造性に関しては, 啓示論ではなくキリスト論において熾烈な論争が行なわれた。
- (13) ただし, 本稿で用いる日本ムスリム協会訳の『コーラン』は, 誤解を避けるために「われ」という表現を採用する。井筒俊彦訳『コーラン』(岩波文庫 1964年)は「我ら」, 藤本勝次責任編集『コーラン』(中央公論社 1979年)は「われら」と訳している。ペトルスが手にしたケトンのロベルトゥスのラテン語訳『コーラン』では, 例えば「われわれはアダムに以下のような命令を与えた」(Adae praeceptum huiusmodi fecimus... :2: 35) というように, 忠実に複数形で訳されている (cf. R. Gleis, *op. cit.*, p. 242, n. 6)。
- (14) cf. 井筒俊彦 *op. cit.*, 上巻 p. 12 の割注。
- (15) ケトンのロベルトゥスは 'Al-Qur'an' を 'qara'a' (集める) に由来するものと見なし, 「戒めの集成」(collectio praeceptorum) と訳した (cf. R. Gleis, *op. cit.*, p. 242, n. 5)。
- (16) cf. Irenaeus, *Adversus haereses*, I, 26, 1-2; III, 3, 4; V, 1, 3. エイレナイオスによると, ケリントスの唱えた説は以下の通りである。彼はイエスとキリストとを区別する。イエスはヨセフとマリアから生れた卓越した人間に過ぎない。キリストはイエスの受洗の際に鳩の姿をとって彼に降下する。しかし, このキリストは, イエスの受難の前に未知の父の名を告げ, イエスの肉体を離れて再び父の下に昇って行く。したがって, 受難したのはキリストではなくイエスである。テキストは, Irenäus von Lyon, *Adversus Haereses-Gegen die Häresien I*, griechisch-lateinisch-deutsch, übers. und eingeleitet von R. Brox, (Fontes Chrtistiani Bd. 8/1) Herder 1993 に拠る。
- (17) cf. R. ベル『イスラームの起源』[R. Bell, *The Origin of Islam in its Christian Environment*, Edinburgh 1926] 熊田亨訳 (筑摩書房 1983年) pp. 186-187.
- (18) 11-12世紀の西欧におけるアンチ・キリスト観については, cf. B. McGinn, *Antichrist: Two Thousand Years of the Human Fascination with Evil*, New York 1994 ch. 5-6 [B. マッギン『アンチキリスト——悪に魅せられた人類の二千年史』松田直成訳 (河出書房新社 1998年)]。
- (19) ダッジャール伝承の発端となったのは, 『ハディース』(牧野信也訳 中央公論社 1993, 1994年)の中で語られているイブン・サイヤードの物語である(『葬礼の書』80: 1; 『聖戦』179: 1; 『正しい身の処し方』97: 1-2; etc.)。彼は, ムハンマドの時代にメディナ在住のユダヤ人の若

者で、神秘的忘我状態に陥る預言者の資質をもち、ムハンマドたちから危険視されていた。ある時、後のカリフとなるウマルが彼の殺害を申し出ると、ムハンマドは、それは不可能だと答えた。この物語から様々な物語が増殖する。それらによると、ダッジャールは毛むくじやら、赤顔片目の人物で生殖能力がなく (cf. 『コーラン』 108: 3), 額には「不信仰者」(kafir) の文字が刻まれている。

- (20) cf. 井筒俊彦『イスラーム思想史』(岩波書店 1975年) pp. 46, 63-64.
 (21) cf. L. Hagemann, *op. cit.*, p. 34 (邦訳 pp. 55-56).
 (22) cf. Irenaeus, *Adversus haereses*, I, 26, 3.
 (23) cf. Isidorus, *Etymologiae*, VIII, 5, 5: 'qui propter pulcritudinem relinquens uxorem, ut qui vellet eam uteretur, versa est in stuprum talis consuetudo, ut invicem coniugia commutarentur.'
 (24) cf. J. Kritzeck, *op. cit.*, pp. 101-107; R. Gleib, *op. cit.*, pp. XVII-XVIII.
 (25) '... quia Sergius monachus, cum in monasterio graviter pecasset et propter hoc excommunicatus et expulsus fuisset, venit ad regionem Tuhemiae (Tihama) et inde usque Mecham (Makka) descendens, ubi erant duo populi, unus cultor idolorum et alter Iudaicus, invenit ibi Mahumet, qui colebat idola.' (R. Gleib, *op. cit.*, p. 244, n. 34).
 (26) cf. N. Daniel, *op. cit.*, pp. 15, 109-110, 262-264; J. Kritzeck, *op. cit.*, pp. 129-130; R. Gleib, *op. cit.*, p. 244, n. 34.
 (27) R. W. サザン『ヨーロッパとイスラーム世界』[R. W. Southern, *Western Views of Islam in the Middle Ages*, Harvard 1962] 鈴木利章訳 (岩波書店 1980年) pp. 47-92.
 (28) 本稿で取り上げた五点に関する、中世の他の思想家たちの理解・論駁については、cf. N. Daniel, *op. cit.*, ch. II-III, VI-VII; L. Hagemann, *op. cit.*, ch. V-VI.
 (29) 'Aggredior inquam vos, non ut nostri saepe faciunt armis sed verbis, non vi sed ratione, non odio sed amore.' (I, I, 24). テキストは、R. Gleib, *op. cit.* に拠る。